

また今日は情報化時代であり、夥しい数の刊行物が出版されている。先日ある新聞に、アメリカ議会図書館の日本での出版物蒐集の記事が載っていた。これによると現在日本で出版される新刊は毎週5、6百点にのぼるが、その中から毎週2百冊及至3百冊を選書してワシントンに送っている。ところで購入した日本語の図書であるがその購入平均単価は2,900円ほどなのに、その目録整備に1冊について推定70ドル(16,800円)にものぼる、即ち購入代金の6倍の費用をかけている。これというのも刊行物は国家の文化財であり、大切にするとともに、国民が必要とする時にすぐ利用できるようにするという米議会図書館の方針によるものであるとのことであつた。流石アメリカであると感心して読んだのである。

厳しい日本の私立大学の財政基盤からして本学図書館はこれには到底近づけないとしても、少しでも本学教職員、学生諸君わけでも研究者たる教員に少しでも満足して多く利用して貰うように努力すべきである。

門外漢たる私にも近時の図書館学の研究実践は素晴らしいものがあることがわかる。本来の情報の蒐集管理だけでなく、レファレンス、磁気テープ、その他の機具の利用で新分野がどんどん発達しつつある。

幸いにもこの紀要が関係者の研究発表、研究に関わる情報、発表の場として広く利用され、図書館員の専門性の確立に資し本学図書館の充実に繋がらんことを冀うものである。

当に三余を以ってすべし

図書館長 佐藤 隆 昭

今回多年の宿願である「図書館学紀要」が創刊される運びとなった。まことに嬉しい限りである。実は5年程前に図書館長を依嘱された当時(その後選挙による)当然経験のなかった私は、何に手をつけてよいか困惑したが、慣れる

にしたがって痛感したことは、日常業務の合理化と共に、図書目録の上梓と館員の研修、資質並びに地位の向上、更にその研究成果の発表の必要性であった。今では館員のごく僅かな数を除いて、全て司書の資格を有するようになり、総務、閲覧、整理の業務分担も確立し、定期的に館内会議、全学図書委員会も開催され、他大学に比し少人数のスタッフで年々増加する^{ほう}膨大な図書資料について、整理閲覧の業務を遂行しつつあることは今や敬意に値する。更に順調に発行されつゝある収書案内と共に図書目録の刊行も開始され、中京大学雑誌目録（昭50・3・31）同増加目録（昭53・11・1）中京大学蔵書目録和漢書の部、語学文学篇（昭51・3・10）、洋書の部、経済・財政・統計篇（昭55・3・10）が発行された。これまた喜ばしいことである。

学問は地味な努力、地味な研究の積み重ねであるが、古き時代においては、やゝともすると、師弟面授相伝という排他的な秘密方式に対し、近時はその学問研究の結果を広く公開し、博く叱声を得て更に前進させるというのが近代的方法である。私はそういう意味で学に志ざす者は出来るだけ機会を得て、その成果を公表することによって、学問の世界に認めて貰いたいと心掛け願っているし又そうあって貰いたいものであると考えている。どうか図書館員は勿論、館員以外の人でも、どしどし提稿されたい。あまりにも平穩過ぎるが為か、不遇をかこっている人、少しノイローゼ気味になっている人さえあると聞く、どうか良き発表の場となって貰いたい。中京大学内だけではない。広く梅村学園全体の人に呼びかけたいのである。

「三余」ということばがある。どんな忙しい人でも、学問の出来る三つの余暇があるということである。冬、夜、雨がそれであるという。「故事ことわざ事典」（芳賀書店）によれば

魏略に

「董遇、字は字直、性質訥学を好む、人従い学ばんとする者あれば、たまに教うるを肯わずして曰く、必らず^{うけか}当にまず読むことを百遍すべし、言う、読書百遍すれば義自ら見ゆと、従学者曰く、日なきを苦渴すと。遇言う。当に三余を以ってすべし、冬は歳の余り、夜は日の余り、陰雨は時の余

りなりと」

魏略について 中国学芸大事典に

佚書、魏の魚豢の撰、魏一朝の歴史で魏の最後の帝、陳留王、奐の晩年にまで及んでいる。民国の張鵬一は佚文を集めて魏略輯本二十五卷（1924）をつくっている。

とある。釈迦に説法だが、佚書というのは名前や内容の一部だけが伝わっていて、内容の大部分が失われていて伝わらない昔の書物をいうのだから典拠を確認し難い。口数の少ない口下手な先生で、たまたま不用意に出会った者には無闇に教えない。まずは読書百遍してみなさい。自然と意義がわかって来るぞとおっしゃる。忙しい忙しいと御託を並べながら、それでいて冬の夜長を暖かい部屋で無為徒食してしまい勝な昨今である。董遇の三余の教えを想起したい。結局読書は暇を見つけ出して励まなければならない。

現在の中京大学の図書館の利用状況は、53年度末の調べでは、入館者数74,179人、貸出しの為の帯出証発行数は1,869であって、これはほゞ全学の14%に当る。あまり良い成績とは云えない。他大学に比し開学後尚浅い年数の中京大学ではあるが蔵書冊数は、和書197,551冊、洋書132,595冊で計330,146冊、和雑誌2,117種：洋雑誌1,004種であって、他大学に比して劣っているとは思われない。是非共その利用を活潑にして貰いたい。それにはやはり教授各位の適切な指導が必要であり、館員の良きサービスが必要であると考え。先生方の教場における一言がどんなにか、学生の読書意慾を向上させるかは、私共が身をもって体験していることである。是非先生方の御協力をお願いしたい。それに図書館員はレファレンスサービスの注文が、どしどしあってこそ働き甲斐のある場所と心得ている。いろいろの難しい注文があり、生き生きとそれに応えているという立派な図書館であってほしいと念願している。最後になってしまったが今度の刊行に当ってまた一段の努力を傾注された編集委員諸氏の御労苦に対し感謝と敬意を表しながら擱筆する。